

幕末明治の写真師列伝 第九回 下岡蓮杖 その八

横浜港は安政6年6月2日(1859年7月1日)に開港され、下田の領事館も閉鎖移転となり、それに伴い同じ年の安政6年(1859)12月には下田開港場閉鎖。翌万延元年(1860)には下田中村にあった下田奉行所も廃止となった。このため久之助もお役御免となる。

そこでよいよ久之助も、写真修業の伝手を求めて、横浜に行くこととしたのである。どういふ伝手を使ったのかは不明だが、久之助は横浜居留地に来日したばかりのショーヤー(Raphael Schoyer、生年不明~1865年)という米国人雑貨貿易商の家に、丁稚のようにして住み込むこととなった。開港された横浜は俄かに発展を重ね、特に居留地は人も建物も全てが外国風といった具合で、久之助にとってはまさに毎日が新鮮な驚きの連続といった状態だった。久之助にとっては見るもの、聞くもの全てが驚異の一言に尽きるばかりの環境にあって、久之助が目指すものといえば、やはり写真術の探求というただその一点であった。

しかしながら、ショーヤーの店では久之助の熱望しているような写真に関する商品も取り扱ってはならず、久之助は日々、丁稚奉公を続ける毎日であった。そんなある日のこと、久之助がこの商館において、筆のすさびに一枚の日本画を画いていたところ、ちょうどすぐ傍に、何の気なしにそれを眺めていたショーヤーの妻は、久之助が画いた日本画にいたく感心してしまい、久之助に改めて更に所望して数枚の日本画を画かせると、その画にすっかり魅せられてしまった。実はこの妻女は、幼い頃から画を好み、その後、画を画くことを学んで、自分でも自信のある画を書くような人だったのであ



横浜港望見(1880年代)(日本カメラ博物館所蔵)

る。

こうしてこれがきっかけとなって、久之助は単に普通の丁稚というよりも、ショーヤー夫妻から特別な温情を受けることになった。そして、ついにはショーヤーの妻は、久之助から日本画を学ぶことになり、逆にショーヤーの妻は、久之助に西洋画を教えて、キャンバス、絵具や筆なども譲ってくれた。久之助は瞬く間にうまい西洋画も画くようなそんな腕前になっていった。

ショーヤーから乞われるままに、日本の風景、風俗を画題としたパノラマ用の画を86枚も描いたのはこの時のことであった。この画は全て縦十尺、横十二尺の大きさで、全て画き終えるまでに一年を要した。

久之助がこうしたことを行っていたある日のこと、ついに運命の人が日本に来て、ショーヤーの家に寄寓することになった。その人物こそ、久之助が熱望した写真術を教えてくれることになったウンシンことジョン・ウィルソン(John Wilson、1816年~没年不明)であった。

(森重和雄)